

# 市長室：対話の記録

## 要旨

## 開催内容の公開

- ・市長あいさつ
- ・内容
- ・市長終わりのあいさつ

第 32 回目となる今回は、旭川及び旭川近郊であらゆるデザインに係わる仕事をしているクリエイターの方々が、業界の発展・向上を目指すことを目的に、講演会や展覧会などの開催、デザインギャラリー、コレクション館の運営など様々な活動を通じて地域の人々との交流や、デザインが果たす社会的な役割や可能性について追求、探求し、道内外諸団体と活発な交流を行っている「旭川デザイン協議会」の方々と日頃の活動状況、まちづくりについて対話、意見交換を行いました。



|      |  |
|------|--|
| 日時   | 平成 20 年 10 月 28 日(火) 午前 10 時 00 分～午前 11 時 30 分   |
| 場所   | 蔵囲夢 チェアーズギャラリー・コレクション館 (旭川市宮下通 11 丁目)  |
| 相手団体 | 旭川デザイン協議会  |
| 出席者  | 旭川市長 西川将人<br>旭川デザイン協議会役員 8名(以下、敬称略)<br>会長 小林謙<br>副会長 池本裕治<br>副会長 滝本宣博<br>事務局長 金田道従<br>理事 小川博<br>理事 靄田俊介<br>理事 矢筈野義之<br>学生会員 中村佳輝 |

## 対話の内容

以下、参加者の皆様については、敬称を省略させていただきます。

### 市長あいさつ

今日は雨の中、またお忙しいところ、デザイン協議会の皆さんにお集まりいただきまして、ありがとうございます。

デザイン協議会は平成 11 年の設立ですから、まもなく 10 年目を迎えますが、小林先生を会長に、これまでデザインという部分から旭川のまちづくりという大変重要な役割を

担っていただけてきました。皆さんに対して改めて敬意と感謝を申し上げたいと思っております。

こちらのデザインギャラリー、コレクション館に東海大学の学生さんの卒業発表作品を毎年展示していただいております、私も何度か作品を拝見させていただきましたが、学生の皆さんは大変高い意識とレベルで、デザインに取り組んできているのだなと感じております。人材を輩出するという部分において、東海大学の皆さん、そしてまた業界、会社の皆さんのこれまでの取組の集積が今日の旭川のデザインの深さにつながっているのではないかと感じております。

先日、マイクロソフト社と契約させていただきましたが、WEBデザインのまちということで、ネットを通じて情報を発信していくという技術革新を、旭川に開設されたりノベーションセンターから発信していくという取組を進めて行くための一つの契機を迎えることができました。それと同時に、地域のICT産業のソフトウェア開発等の産業支援発展にもつなげていければと思っています。

今、あらゆる分野、業界においてデザインが非常に重要視されてきている中で、まだまだ日本社会においては、デザインの対価と言いますか、これだけの費用がかかるということに対する認識が十分ではないということがあるのですが、全てにおいて売出す時には、その物自体はもちろんですが、それ以上にデザイン性が大変重要視されるということで、今後ますます注目されていくものと思っております。

デザイン技術を持った企業、また技術者の今後の経済、社会的地位も必ず向上していくだろうという期待も持っておりますし、家具を中心とした旭川の木工ですとか、また今回のWEBデザイン等、またお菓子の包装紙のデザインなど、こういったものが大変売り上げに影響してくるということで、今日はその分野の専門の皆さんから、是非アドバイス、お知恵をいただく中で、市としての取組、また民間の皆さんに対して様々な部分で、市からもPR・啓発をしていくことができるようなご提案・ご意見をいただくことができればと思っています。

冒頭簡単ではございますが、皆様にお集まりをいただいたお礼も込めて、ごあいさつをさせていただきます。今日はどうぞよろしく申し上げます。



### 小林

本日は、このような機会を与えていただきありがとうございます。

ここがデザインギャラリーという今のような形となって動き出したのは1999年ですが、その一年前ぐらいから活動しています。旭川市とデザインによるまちづくりということを考えていく中で、いろいろな分野のデザイナーたちが集まる場をつくらなければいけないということになりスタートしました。それとこういった古い文化の香りを残している建物を保存するという二つの動機が重なって、このようなデザインギャラリー、そこを城として活躍するデザイン協議会というものを設立しました。

旭川市がデザインに対して大変期待していただいているということを受け、何とかここを拠点に我々の力で少しでも旭川の活性化につなげたいということで様々な企画をしてまいりました。こういった立地で年間約2万人が、デザインギャラリーとコレクション館の両方を合わせると約3万人が来られるようになっており、普通の美術館でもなかなかそれだけの人たちを集めるのは難しいところを、あまり立地条件が良いとは言えない所で相当努力しています。

また、私が宝物のように思っているのは人です。ここを運営するに当たり、いろいろな分野のデザイナーだけではなく、デザインとは直接関係のない企業の人たちが、理事会だったら年に6、7回、いろいろな会議を含めると30回ぐらい、それぞれ手弁当で個人的な時間を割いて夜ここで会議を開きます。企業の社長や学生が立場を越えてそういうことができるという土地柄といいますか、そこがすごいところだなと思っているところです。

先週、「旭川ポリフォニー」という企画があり、会場が替わったりといろいろありましたが、ポリフォニーというのはほとんどない企画で、ある一企業が全く名前を出さずにお金だけを出して、中央から哲学者であるとか文学者であるとか翻訳者であるとか芸術家だとか、その道の有名な方たちを集めてセミナーを行うと同時に、まだ日本に紹介されていないスウェーデンの歌手のコンサートを開くということを行いました。コンサートはある程度の参加者は期待していましたが、哲学者のセミナーにはどれだけの人が来てくれるのか少し疑問でしたけれども、300人の会場が全て埋まり、2日間の会期を通して約4,500の方が参加していただき、大変旭川市は知的なことに対して貪欲な土地柄だなという感じがいたしました。このように市民が知的なことに対して貪欲で、なおかつ企業の方たちも手弁当でこういうことをしているということは、旭川市が持っているマンパワーというか、キャパシティというのは他のまちには見られないものがあると思っています。

デザインにはいろいろな側面がありますが、一つの側面は、例えばものを開発して提供する時には、技術者、営業マン、もちろん使う人の意見も必要です。それらの人たちの意見を全て取り入れて一つの形にするというのがデザインの役割みたいなものですから、デザイナーが産むのではなくて、そういう意見を集約したものを具体的な形にするのがデザインの役割なんですね。そういう意味で我々デザイン協議会は、いろいろな方たちとつながりを持ちながら、例えば食品については、食品から食卓までデザインを広げていくというような発想を持って、全体的に一つの形を、旭川スタイルというものを作っていくという中で我々は何ができるのかなと思っています。またいろいろとお願いしたいこともあるかもしれませんが、そのあたりのことも含めて、今日はゆっくりお話しをさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

## 金田

金田と申します。事務局長をしております。

この会とは創立1年目から、最初は幹事ということで参加させていただいております。

若干デザインと関係があるとすれば、今はなくなったのですが、北海道産業デザインコンペというのがありまして、クラフトとパッケージと工業デザインという3部門があり、各部門に金賞があって、3部門の中で一番いいのがグランプリなのですが、パッケージ部門からはなかなかグランプリが出ず、グッドデザインはJRのL特急など、工業デザイン部門やクラフト部門から出ていたのですが、我が社の豆のパッケージがパッケージ部門での最初のグランプリをいただきました。江丹別の開壱そばが金賞をいただき、甘納豆のパッケージが銅賞、お菓子でも奨励賞を2件いただいて、銀賞を取るとパーフェクトだったので、そのようなことがあり今関わらせていただいております。

デザインカというものを、まざまざと見せつけられたのが、江丹別の開壱そばのパッケージです。それまでなかなか鳴かず飛ばずだったのですが、ギフトで何とか売り出そうということで、デザインした時には賞に入るとは思わないし、販売することを前提にしないで作ったパッケージだったんですね。本来プロのデザイナーというのは経済的なことや、紙質ですとか印刷方法なども考えてやるのですけれども、何せ素人で、見栄えの良いものを作ってしまったものですから、量産する時に苦労しましたが、その入賞したデザインにパッケージを変えて売り出したところ、売り上げが倍になり、その時にデザインカ、見た目、消費者の行動も外見からなんだと思われました。我々のようなブランドのない商品は、いかにして売り場でお客様の興味を引くかというデザインしかないんですね。特に我々のような中小零細企業の商品は大手と違って、新聞広告など広告を出すだけのコストを掛けられないのですが、パッケージというのは物言わぬセールスマンです。まずパッケージで興味を引いて、手に取ってもらう。うちの豆がなぜ大賞を取ったのか審査委員長に聞いたことがあるのですが、うちの今回大賞をいただいた商品はデザイン性に優れているわけがなく、ほかに優れているものがたくさんあるんですね。なぜ大賞になったのかというと、ローカルコンペだと思うのですが、商品をいかに簡潔にパッケージで表現しているかということだったのです。一次産品ですから、その頃はあまり表示したくなかったのですが、生産者の名前や生産地、いつ取れたとか、消費者にとって必要な情報をできるだけ

パッケージに入れる。それはなぜかという、まず手に取らせ、中身をいかにお客様に理解させるか、その時には客観的な情報を付けることがまず先決だろうということで、品質評価という中身をまず分かってもらって買ってもらう。そこまでの全体のグランドデザインを多分ローカルコンペなので評価していただいたのだろうということです。大きなコンペなら最初からどこにでもあるデザインだねで終わると思います。北海道の審査委員の方は商品というものを見ていただいている。道産品のパッケージにはその傾向が顕著に表れている。デザイン力によって売上げが変わるというのは事実なので、このことは皆さんに知っていただきたいと思います。

旭川というのはデザイン力がすごいんですよ。今、札幌が商工会議所を含めて、札幌デザインと言ってデザインに非常に力を入れています。以前からこの会でもデザイナーとパテシェのコラボで、そこに生産者が入って、素材をデザイナーに預けて、まず作り方などは度外視してデザインを決めて、そういうことを澁谷先生(現デザイン協議会顧問)の時代からやろうやろうと言っていたのですが、その一部を札幌に先を越されたのですが、当会は器から素材からテーブルから椅子まで全部そろっていますので、そういったことを是非アピールして、札幌に負けたくないことをこれからやりたいと思っています。

最後に一つ、私も零細企業のおやじですけども、この会は個人事業主が多いんですね。皆さん、こうやってお集まりいただくということは、手を休めることになり、収入がなくなるということです。これまでいろいろなことをやっていく中で、何のためにこういうことをするのか、目的意識というところがかなり葛藤もあったと思いますが、10年節目にして本当に驚くのは、何かやる時に与えられた任務をもくもくと遂行する、こういう会というのは見たことない、素晴らしい会だと元会長も言っていました。貴重な税金を投入していただいていることの有り難さも皆認識していますし、それをもっと外に出すような努力をしていかなければならないなと思っております。なかなか難しいところですが、一生懸命やっている会だということをご理解いただけたらと思います。

#### 市長

デザインということで先進的な取組を進めてきているんですね。

#### 小林

北海道産業デザインコンペは私も何年間か審査員をしていたのですが、やはり旭川を配慮して、また旭川かというのは嫌なので、選ぶとするのですが、結局パッケージだったら、壺屋さんとか、札幌のきのとやさんが毎年出てきているんですね。パッケージデザイナーの人たちがデザインしているのが出てきたりします。札幌商品でも旭川でデザインしているのがあったりしますので、そういう意味では旭川は木工はもちろんのこと随分出てきます。

#### 市長

ありがとうございます。

#### 矢筈野

今日、来られなかった伊藤専務理事からは是非伝えてほしいということをお預かってきておりますので、それを読ませていただきます。

「本日は市長との大切な席に、出張のため参加できず申し訳ございません。せつかくの機会ですので、代読で意見を述べさせていただきます。

まず旭川は北海道において札幌や函館、帯広などデザインの団体が活発に活動している他都市に比べ、先進的な取組や事例を作ってきています。国際家具デザインフェア旭川はもとより旭川工芸デザイン協会や旭川広告デザイン協議会は創立20年を迎え、そのほか建築、ファッション、エクステリア、インテリア、フラワーや写真など様々な関係のデザイン関係者が集い、デザイン振興のために努力をしてきました。今年も開催された旭川デザインマンスを例に取っても、その成果が現れています。これらの事業や取組はデザイ

ンギャラリーやコレクション館という具体的な活動の拠点があり、市民と一緒にデザイン振興活動をしているというメリットがあることも大きなことでしょう。また、先日旭川ICT協議会の取組であるマイクロソフトリノベーションセンターの開設などにおいても旭川デザイン協議会がかかわるなどデザインの果たす役割の豊富さは明確でしょう。私たちデザイン協議会は自分達の業界の振興を図ることはあらゆる分野の振興につながると信じています。

ここで伊藤の勝手な意見ではありますが、市長に一つ提案させてください。

一、市の「ものづくり推進室」を「ものづくりデザイン推進室」としてはどうでしょうか。

二、「工芸センター」を「工芸デザインセンター」としてはどうでしょうか。

デザインとはあらゆるものづくりに不可欠な要素ではありますが、少し広義でとらえた場合、デザインとは物のみではなく、事づくりにおいても重要な役割を担っています。人の心が豊かになり、子どもから大人まで楽しく生きることができるようにもデザインが不可欠です。その結果、経済や観光、文化など振興を果たせるものと信じております。今後も旭川市と我々デザイン関係者がお互いのポジションを確認し合い、それぞれの役割の中で任務を果たして行ければと思います。以上、よろしく申し上げます。」以上です。

#### 市長

今後の検討の材料にします。

#### 矢筈野

よろしく申し上げます。今話に出ていたように、旭川という所は、デザインというものに対してモチベーションが高いと思います。自分はよく札幌に行く機会が多く、向こうの人たちと話したり、東京から呼んだデザイナーと話をしますが、本当に昔は旭川は閉鎖的なところで、外を見たがらない、この枠の中でやっていけばいい的な要素が強く、自分達のレベルがどのくらいあるのかと計る機会がなかったんですね。札幌ではそういう機会があって、出て行くと本当に東京であったり、札幌のデザイナーと比べて差がないんですね。賞を取っていますし、レベル的には低いわけではないのですが、いかんせんまだ外に出たがらないというところが強くて、そこを何とか外に引っ張り出そうとしてはしているのですが、そういう強い団体ももっと増えていってくれるといいと思います。

先ほどのケーキとデザインのコラボレーションのようなものを今週末からやるんですね。旭川でいうところの旭川デザインマンスのような、札幌デザインウィークというのを建築とかインテリアとかが関わって、1週間札幌の街中で行います。今回で4回目で、旭川デザインマンスも同じ時期に始まったのですが、札幌は盛り上がりつつあるんですね。旭川も負けられないようにしていかなければならないと思います。今、来年の旭川デザインマンスをどうしていかうか話し合っているのですが、市の方にいろいろ助けていただく部分であったり、協力していただける部分がこれから増えていくのかなと思いますので、デザインということで市の方で協力していただきながら進めていければと思います。

なかなか渋い話しか聞こえて来ないものですから、そこら辺をこれからどうしていくのかということが大きなポイントになっていくのかなと思います。特に若い子たちを引きずり込んでもっと活性化させるということでは、これをデザインしたらいくらなんだよということをはっきり言えればいいが、今の子はかなりシビアですから、ボランティアではやれないよという感じなので、なかなかこの辺が厳しい感じはします。今後、市の方と協力しながら、若い子たちを育てていかなければと思っています。

#### 市長

私の場合、選挙用ビラですとかポスターを作る時に紙代と印刷代、インク代、それとデザイン料が掛かりますよね。そのデザイン料を値切るの、怒られるのですが、意外とまだそういう感覚は残っていて、それがデザイン業界の皆さんにとって一番苦勞される部分かなと思います。

### 矢筈野

一般の方たちが悪いのではなくて、代理店が悪いんだと思うんですよね。デザインを無料にしますので仕事をくださいという訳の分からないことを言うんですね。うちはデザイン料ただですから、コンペさせてくださいとか。そうことを言う会社があること自体、デザイナーをばかにしています。いつも、「うちはデザイン料で食べているのだから、デザイン料を払えないならそんな仕事はいらない」と言うぐらいのつもりで営業をしてこいと言っています。向こうが言うなら分かるのですが、自分達で言うのはどうなのかなということはありませんので。一般の人たちがそういう感覚になってしまったのはこちら側のせいだというのはかなり強いですよ。

### 市長

形の見えないもの、知的財産ですよ。

### 小林

旭川の家具業界という、非常にデザインにお金を注ぎながら、しかもそれなりに発展してきているという先進例があり、形に見えるデザイン料だけではなく、国際家具デザインフェア旭川のように関係企業が企業色を出さずにかなりお金を払っているところがあるんだよね。このようにマネジメントしてやっているという良い例もあり、日本の家具産地の中では一番デザインが進んだ状態になっていますよね。そういう例もあるので、今日はたまたま家具の人たちはいないけれども、そういう例も参考にしながら、ほかのデザインの位置も考えていくというのがいいと思います。

### 矢筈野

北海道新聞さんと一緒に組んで道新広告賞を広告デザイン協議会でやると、それなりのスポンサーを探してきてくれて、きちんとコンペとしての対価を払うようになっています。このようにいろいろな形でデザイン料をみてもらえるようにアピールすることは少しずつ増えてきていますが、一般の人たちにもデザイン料というのは払わなければいけないんだなと知っておいてもらえればいいのかと思います。

### 小林

そういう意味では、広告デザイナーたちがこの会の推進力であるよね。非常にハングリで、自分達の仕事は待っているのではなくて、自分達で作る、事をおこしてその結果として出てくる仕事を自分達が取ると、そういうほかの業界ではみられないことをしています。矢筈野さんは横浜から来て、帰らずに旭川に定着してしまった人ですが、旭川から出発して行って、日本各地、世界中に散らばっている人はたくさんいるので、そういう人たちを呼び戻すことができればと思います。今いろいろな通信手段もあるので、例えばうちの大学で先生が必要だという時に求人すると、九州からも応募してきます。「引っ越ししてもいいですよ。仕事はインターネットでできる部分もあるから」と言います。そういう人たちにどんどん来てもらう魅力があるそういう地域にしていきたいと思います。

### 市長

そういうことができれば、うちの産業も活性化しますよね。

### 小林

トップ企業に勤めているデザイナーもいるわけだから。

### 市長

独立している方を旭川に呼び戻していけたら、底上げにもなりますね。

### 金田

道の功労賞の副賞でマイチェアというものを出しているのですが、昨年、道庁から、これを木で作るので旭川でできないかというお話しをいただいたのですが、道も予算がないので1脚10万円で、さらにオリジナル商品にしてくださいと言われてました。デザイン料だけでそれ以上掛かりますし、オリジナルであれば制作費も掛かりますし、木も道産材指定なんですね。たまに行政の人は訳の分からない根拠のないことを言うんですね。予算がないと言えば通ると思っているようなところがありますが、旭川だけはそういうことのないようにお願いしたいと思います。行政がそういうことになると、民間は右習えになります。予算がない時にはないなりに協力はしますが、10万円にしたとしても、30万円の値がある物だと認識した上でお話ししてくれればいいですが、その時の担当者は全く理解も、道産材のコストも分からずに、一方的にお話しされてきたので、それは無理だと思いますよ、会の方にはお声掛けはいたしましたという話で終わりました。

行政の予算の中にデザイン料という科目がつくられるようにしていただければありがたいと思っています。

### 市長

せっかくですから、学生さんからもお話しをお聞きしたいと思います。

### 中村

今年の旭川デザインマンスで東海大学の学生と買物公園のお店の方に、お店の中でいち押しのデザインはどれですかという展示をしたのですが、僕らが予想していた以上に市民の皆さんに参加していただいて、成功と言えるのかは分かりませんが、非常に良かったと思います。

地域と一緒に物を作り上げる時に、当然僕らは良い物を作りたいと思って、お店の方の話を聞いたり、いきなりデザインのことを話しても分かりづらいので説明をしたり、自分たちも精一杯頑張りましたが、そういう時に地域の方々も一緒になって、自分の商店なり自分の地域を盛り上げるんだという気持ちで一緒になってやっていただかなければ、デザイン側だけのひとりよがりになってしまいます。旭川のために頑張りたいという思いはあるけど、みんなで盛り上げていかなければならないと思います。

### 市長

轟田さんは商店街の関係者ですよ。まさに駅前の顔と言えば顔ですよ。

### 轟田

初めて買物公園が旭川デザインマンスに参加させていただき、旭川屋で「私の店のいちおしグッドデザイン展」を開催しました。一応17点集まり展示会はできましたが、買物公園には100店舗近くありますから、皆が何か持ち寄れば100点近く集まったはずなのですが、結局集まったのが17点でした。

なぜ商店街の事務局の立場の僕がデザイン協議会に参加しているかというと、東海大学の出身で、もともとは鹿児島出身なのですが、家具のデザインをやりたいと東海大学に入ったんです。旭川のグラフィックデザインなどを目にする機会があって、デザインに対する意識が高いんだと認識しました。しかし、意識がある方はすごく理解はしているのですが、一般の方でそういう分野に関わっていない方に話をすると全く知らないという現状があるんですね。いろいろな方とお話しをする中で、本当に全く知らない人は知らないというギャップがすごく、旭川はこれだけ財産を持っているのに、一般の方まで広がっていないんだと感じています。そこで多くの人に魅力を伝えるために何をしたらいいんだろうと思った時に、旭川を中心である買物公園で多くの方に見ていただける機会をつくっていただければ浸透していくのではないかなということで、買物公園の事務局という立場でデザイン協議会に参加させていただいています。

今年初めて旭川デザインマンスに参加させていただいて、改めてデザインというものに対する意識の低さが改めて浮き彫りになったと感じています。知らなかったところに一石

を投じたわけですから、来年、再来年これをどうやって育てていくのかというのが課題なのかなと思います。10年先に盛んになっているかもしれませんし、なっていないかもしれませんが、今年に関してはいろいろな方からいろいろなことを言われていますが、甘んじていこうかなと思います。

#### 市長

そうですね。同じような現状を感じたということでものね。よく世界のトップデザイナーとか有名な人がデザインした服などは、何倍もの値段で売っていますが、デザインの分野のフィールドはいろいろあるのでしょうかけれども、あういうデザイナーになりたいという若い人たちは結構いるのでしょうか。

#### 中村

個人差があると思うんですね。有名になりたいという思いの人もいるし、真に良い物を世に送り出したいという思いの人もいます。

#### 市長

やはり少しそれは違うのでしょうかね。

#### 小林

分野によってニュアンスがちょっと違うと思いますが、うちのようにものづくり的なものとか、建築という分野だとまっとうにやっていって、結果的に有名になりたいということはあるかもしれない。まっとうなやり方をしていきたいというのはあるかもしれない。

#### 市長

デザインの世界ではパトロンというのは大事なんですか。

#### 小林

イタリアあたりでインテリアデザイナーというのが出てきたのは、文化の幅が広がって変な物でも生かしてくれるという素地があったということは当然あるかもしれないが、そういうことで育ってきたイタリアの著名なスーパーデザイナーの話を聞いてもかなりまっとうだね。基本はきちんと押さえている。基本的には使う人のためにとってことですよ。

#### 市長

そこにどうスポンサーをつけていくかということなんですね。

#### 小林

ブランドやパッケージの話がありましたが、僕が思うのは、ブランドになるためには良い物を作らなければならないだろうし、パッケージで売れるのではなくて、中身がそれなりのものがなければパッケージだけでは売れないと思います。

先ほどの買物公園の話は、僕が仕掛けた意味というのは知っているだろうけど、要はデザインという言葉を実に口実にして、良い物をきちんと売れる店をつくるということだったんだよね。そこに行ったら良い物が売っているよという商店街ができれば、自ずからきれいな店だろうがなかろうがお客さんは集まってくるのであって、要するに靴屋さんなら靴屋さんのプロになってほしいという、そういう願いでデザインという切り口でやったんですね。そこもこれからだと思います。

#### 市長

買物公園はまちの顔ですから、お力添えよろしくお願いします。

#### 滝本



私は東川町で陶芸をしており、旭川工芸デザイン協会の会員でもあります。

物を作って、それを売っていくらという、とにかく売れないと生活できないものですから、この中では売るという事に関して割と考えている方だと思います。売するためにはデザインも最低限オリジナルデザインをつくっていかなければならないですし、またデパートに行って実際に売ったりなどしています。

個人としてクラフトの立場からお願いがあります。ここの隣の建物では販売はできないんですよね。運営管理に対する市の補助を受けていますので。ただ展示会を開いて見せるだけです。皆さんには喜んで見ていただいておりますが、見ず知らずの人間がつくって、気に入ったデザインをお金を出して買っていただけるということが僕らにとっての評価になるものですから、是非、隣のデザインギャラリーで販売ができるようにしていただきたい。

クラフトをしている人間がこの会から減っておりますが、それはこの会に入ってもメリットがなく、デザインギャラリーで展示会をやっても、お金が出て行くだけで、収入にならないということが大きいと思います。ほとんど皆個人でやっていますので。際限なく売るといのは少し問題がありますので、売するための制約は必要になると思いますが、ある程度の販売ということもさせていただいて、その上かつ協議会に、例えば売り上げの何%かを納めるというようなことをしていくことで、協議会も独立できるような財源を得ることができずし、市からの補助が減らされても困りますが、増えることはないと思いますので、そのようなことも考えていただければと思います。

#### 市長

そこで商業活動を制限しているのは条例でやっているのですか。

#### 工芸センター所長

条例ではありませんが、ここをお貸しする時に、販売目的としての宝飾販売とかそういうところが入っては困るということで。

#### 市長

制限が必要ではありますよね。

#### 経済観光部長

要するに営業の拠点になっては困るということですから、そこは折り合いが可能なように最初から作ってありますので、ここが自主財源を稼ぐという意味でもあっていいことでもありますし。

#### 市長

サイパルに煉瓦の建物がありますが、リニューアルして大きなホールがあるのですが、そこはかなり規制を緩めて、商業活動もできるような方向で検討しているんですよね。中がどんなつくりになるか、詳細までは決まっていないでしょうけど。

いずれにしても煉瓦の建物については検討しているのですが、ここの隣も何か良い方法がないか協議させていただきますね。

#### 池本

副会長をしています池本です。私の方からはお願いが2点ほどあります。

子どもたちに向けたデザインの啓蒙と言いますか、それが重要だと考えています。小さい頃からデザインの楽しみを教えないと、なかなか質の高いものにはならないと思います。先日、NHKの番組で東芝のアメリカ企業の買収の話が出ていましたが、原子力発電所の部門をつくるアメリカの企業を買収するために、東芝がどうしたかという、アメリカの各地区で発明工夫コンテストのようなものを開いて、日本の企業がアメリカの大企業を買収しても反発が多いので、そのため何年も掛けて普及活動をやったという良い例

があります。先ほどのお話しのように、どうも皆さんデザインに関心がないということが一番大きいのではないかと思います。別の会で「お菓子の家づくり」ということをやっているのですが、これは旭川市内のパティシエさんや菓子商組合にご協力をいただいて、毎年子どもたちに実際にスケッチをつくってもらいます。10組集まってもらって、お菓子の家づくりしてもらいます。本当にすばらしいアイデアが出てきます。そういう子どもたちのいろいろな才能を発揮する、ものづくりの楽しみ、職人のすばらしさを感じ、またデザインに興味を持つ機会を与える場を学校教育とは別に、例えばサイパルの中に組み込むなど、そういう工夫をしてしていただきたいと思います。子どもたちに向けたデザインについての具体的な啓蒙活動をしていただきたいと思います。

また、高齢社会の中、旭川市も65歳以上の人口は15パーセントをはるかに超えていると思いますが、高齢者の使用する家具や杖など、いろいろな分野のデザインや機能性について、これから新規に開拓できる物がたくさんあると思いますので、そういった作品づくりのための専門のデザイン分野をつくっていただいて、旭川市から全道、全国に発信し、旭川デザイン的一端を担っていただくようにしていただきたいと思います。

私は建築の設計をしているのですが、大きなコンビニが旭川に来た時に、第1号店舗から60号店舗まで手がけた中で、皆、店づくりについて基本的な考え方もっていました。それは意外と単純で、お店をきれいにする、クリーンにする、快適にする、暖冷房を完備して、それともう一つは欠品がないということです。また、フレンドリー、言葉を交わしてもものづくりをする。それと駐車場をきちんと確保するという、このように基本的なことをきちんとやるということでした。

私が言いたいのは、買物公園に行く時、どこに車を止めればいいのか、自転車は買物公園に置いてはいけない、ではどうすればいいのかという人間行動について、普通に思うことをきちんとやるということが必要ではないかなと思います。それを基幹整備として次に進んでいただきたいと思っています。

### 小林

子どものデザイン教育については、実は昔デザイン協議会で「夢のデザインコンテスト」というものを開催していました。小学生の子どもたちに、どんなものがほしいですかと、スケッチを描かせて、何が出てくるか分からないものを選んだんですよ。そして、プロと一緒に選んだものを作ることをやったんですよ。いろいろなものが出てくるものだから、プロの人たちは七転八倒してそれを作りました。何年か続きましたが、お金も掛かるし、時間も掛かるし、大変ですごく負担が掛かったわけですね。全然相手は妥協しませんし、皆真剣でしたから。

### 滝本

あれは面白かったですよ。豚の形をしたコンセントの付いた貯金箱みたいなものを作れと言われて、どうしたら焼き物でできるかと、本当に真剣に、利益にはならなかったですが、すごくデザインとか作る勉強にはなりましたね。

### 小林

経済的な援助があればもう少し続いたのかもしれませんが、旭川の中でできる技術範囲というのがあり、小学生がいろいろな事を考えても、木工ならできるけど、金属ならできないなどというものもあり、ある程度やっていくとパターンが決まってきて、皆家具になってしまうということがありました。何らかの形で継続するのは面白いと思いますけどね。

池本さんは教育とは別にと言われましたが、僕の立場からは教育の方を考えたいなと思っています。小、中、高校で美術や技術家庭などそういう科目が教育課程の中からどんどんなくなり、高校ではほとんど美術の先生はいない状況です。うちの学生が減ったのもそれが一因だと思っていますが、例えばこういうところで集まりがあっても、経済観光部の関係の方は集まっていただけですが、教育委員会の方は関係ないですよ、こういうデザイン関係の集まりには。

**市長**

それなりのアプローチをすれば、学校にも入っていただけますけど。

**小林**

僕は彫刻美術館の協議会の関係もやっていますが、彫刻美術館の人たちの頭の中には全くデザインというのはないですね。つまり美術は教育委員会の世界であって、デザインは商売の世界の話だという区切られた状態になっていますね。

**市長**

市役所の組織内ではそうなっているんですね。

**小林**

国の組織も同じだと思います。結局、デザインというのは商売とかものづくりとかいうものの中に、文化というものを入れる作業ですから、それは教育委員会のレベルのものも相当あると思います。そのあたりが特区になるかどうか分かりませんが、これぐらいのものづくりとかデザインに大きな力を持っている地域ですから、その中での教育の体系というものも考え直してみる必要があるのではないかなと思います。

**市長**

美術の先生がいなくなるというのは、将来的に深刻な問題になるのですか。

**小林**

大変深刻で、その結果かどうか分かりませんが、うちで提携している道立の音威子府美術工芸高校がありますけれども、そこは人が集まっているんですね。唯一美術の先生が校長先生で、道内からも全国からも人が集まってきています。美術をやりたい子はいるんですけども、多くの高校にその教科はないというのが現状です。

**池本**

私は音威子府高校を卒業しました。

**滝本**

私は東川町に住んでいますが、旭川の小学校に陶芸を教えに行っています。私には子どもがいなくて跡を継ぐ人がいません。逆に大勢の子どもたちに教えて、その中で一人でもいいから陶芸、デザイン関係に進んでくれる子が生まれてくれたらいいなと思い、できるだけ楽しい陶芸、できあがったものが思ったより良くなる物、子どもたちが全て自分でやって良くなる物ということで、昨日と一昨日も高台小学校で100人程度に教えてきました。皆さん、面白かった、楽しかったって言ってくれるんですね。

**市長**

実際にぐるぐる回して、焼いてですか。

**滝本**

ろくろは使いませんが、実際に使えるカレーライスの器を作っています。また色粘土を使って、皿の中に自分の好きな模様を付けて、作っている時は一切色は見えませんが、焼くと色が出てきます。東川の子どもたちにも20年近く教えていますが、未だにそれを使っているという子がたくさんいるんですね。

将来、職業を選ぶ時に、楽しかったという思い出がきっかけになることもあります。私自身も小学校で陶芸をやって楽しかったという思い出があってこの道に入ったので、できるだけ多くの子どもたちに作る楽しさ、デザインする楽しさを知ってもらいたいと思い、小学

校から声が掛かると、ほとんど利益にはならないのですが、全てやらせてもらっています。

#### 小林

旭川のものづくりの人たちは意識が高いです。夢のデザインコンテストも匠工芸が始めたことなのです。木工屋さんもそういう意識が高い。是非教育という面から取り入れていくというのはあるのかなと思います。

高齢社会の話ですが、明日「旭川ウェルビーイング・コンソーシアム」のシンポジウムがあるけれども、4大学1高専でもって、連携して何かできないかということになっている。高齢社会のものづくりというのは4大学のテーマになりそうだね。

#### 池本

実際、販路はすごく広いんですね。販路というか、いろいろな分野というか。

#### 小林

販路があっても売れなければ困るので、大学の先生がそれを考えなければならないでしょ。我々がその形を考えて、検証を医大がやるんですよ。そういう観点考えられるよね。

#### 市長

私は明日出席できなくて、すみません。

佐々木次長、前館長として、科学館はどのようなイメージでやっていましたか。

#### 総合政策部次長

科学館の1階部分は小林先生にオーダーメイドでコーディネートしていただきました。結果として非日常的な空間として配慮していただいたような感じがいたします。非日常ですので、黄色とか赤色の原色の壁ですとかいろいろありました。ものづくりは科学にとって大変重要だと考えていましたので、2階にかなり本格的な木工室があり、そこで木を使って子どもたちがいろいろなものづくりをするのですが、木に限らずいろいろな工作もそうですが、科学館の場合は、まずお手本があって、それをきちんと作るという技術をまず身につけるというところから始まりますので、そこに自由なデザインの発想というものを生かしていくというところまでは、まだ実現できていないのかなと思います。ですから、そういう意味では例えば科学館の中でもう一つ講座をつくって、技術だけではなく、デザイン関係の方々にいろいろご指導いただいて、一緒にものづくりに参加していただくような形を取っていく必要があるのかなと思います。

今、お話を聞いていて思いついたのですが、来年、昆虫展の第2弾を開催しようかと思っていて、昆虫の標本を並べてばかりでは私の好みすぎるので、できれば、虫をモチーフにしたおもちゃや家具などを集めて展覧会をしたらどうかというのと、虫をテーマに子どもたちの工作コンテストをやってみようかなと思いました。見た人がわっと思うようなことを作っていくというのは子どもにとってすごく楽しいことだと思うんですね。ただ単に虫はこういうものだよというだけでなく、そういう自然界の虫とは別のアプローチでやっていくというのは面白いかなと思いますながら、それを書き留めて、明日でも科学館に持っていくかなと思いました。

#### 小林

佐々木さんは、以前「旭川市デザインビジョン」をつくりましたね。

#### 総合政策部次長

もしかしたら話になるのではないかとって持ってきましたが、こういう昔作った本があります。

## 小川

北海道内でホームページを一番最初につくった市は旭川市です。その時は商工部から内々で話がありまして、当時は市役所内にサーバーがないから、外につくろうということになりましたが、予算はない。でも、公で市の看板を背負うのだから変につくったら内部で問題になるなどいろいろあったのですが、取りあえずやってみましょうということになりました。立ち上げて1か月もしないうちに、STVから行政とどのようにうまく関わっているのかと話があり、市が市民向けの広報として立ち上げたものですよということで1時間番組を作った経緯があるんですね。それがWEBの中の長い歴史の中で、市内のWEBデザイナーが育ちましたし、私としては十数年間良かったなという感想を抱きました。

実は私は純粹にデザインを学んできたという経緯の持ち主ではなく、元々は商業経営、どちらかというとマネジメント、人の計算をするのは嫌なので、ものづくりということで工業、その後商社に何年か居て、元々工業系の中でコンピューターを扱っていたので、当時は数少ないそういう技術を持っていたものですから、CGというコンピューターグラフィックの方に入って行き、そちらの方が長くて、今はどちらかというとデジタルデザインという分野で活動しています。

以前、旭川の中小企業大学校で十数年間企業の登録をしていた時に、道内で600社ほどあったのですが、その中で一番感じたのは、帯広の本屋さんの充実感です。旭川が30万都市で、それ以下の帯広で、雑誌、専門書の種類が人口比で見るとかなりの数がそろっていました。これは文化水準ではないでしょうか。

市ではいろいろな統計を持っています。道内でどんな違いがあるんだろうということを、広報誌に掲載して市民に投げ掛けてほしいと思います。道内の第2の都市ということはほとんどの市民が知っていますが、産業や農業などについてどのくらいのレベルなのだろうかということをも市民一人一人が知らない、次のステップの文化が育たないような気がします。それができるのは、行政の中で統計を持っている部署であり、あるいは近隣とかあるいは道内の市町と関係を持っている部署でないといけない。我々民間人だと探してこななければならないという手間がかかるので、是非、市の広報誌を通して、旭川の文化水準などを知らせた方が今後のためになるのではないかなと思います。

それから、今、大学の方で図書館長をしているのですが、その関係で市の中央図書館の山下館長と話したことがあるのですが、デザイン振興ということも考え、市の図書館で場所を提供していただき、「デザイナーが薦める1冊」という講習会をやっても面白いのではないかなと考えています。

## 市長

「デザイナーが薦める1冊」というのは例えばどのようなものですか。

## 小川

例えばきっかけになった本とかね。

## 市長

デザイナーを志すきっかけになった本ですか。なぜそういう道を進んできたか、影響を受けた本ということですね。

## 小川

いろいろな分野で今これが面白いとかね。

## 小林

まず大学の中でやってくれですね。

## 小川

情報メディアはあるのですが、活字で見たものが一番印象に残ります。今、インターネット

トやテレビなどもありますが、なかなか残りません。活字の方がかなり残ります。高校生も社会人もそうですが、一度、活字文化に戻すことが必要ではないかと思えますね。

#### 市長

以前、テレビで人間の脳のどこを使っているかという番組を見たことがあります。テレビを見ている時はほとんど脳は使っていないんですね。本を読んでいるときはもう少し使っているんですね。脳も退化してしまいますね。

#### 小川

結局そこから次の発想がないんですね。だから、きっかけになればいいと思って、そういうこともちょっとやってみたいと思います。

#### 市長

統計についてですが、広報誌ではありませんが、市のホームページの中に若干旭川市の統計という項目があり、米が全国何位などいろいろ載っています。どの程度のレベルのものが必要なのでしょうか。

#### 小川

行政でアンケートを取って公表されているのは一部分ではないでしょうか。2次加工、3次加工はできない状態で公表されているんですね。ただ見て、2位、3位だねというだけで次の発展にはつながらないので、もったいないと思います。

#### 市長

それだけではあまり意味がないということなんですね。広報誌で特集を組むことができるか検討させてもらいますね。

#### 小川

専門的な知識がなくても分かるようなものでないと情報として役に立たないんですね。

#### 市長

行政でそれが分かるかどうかというのがありますよね。どう誘導していくか。かなり専門的なことがあると思うんですね。

#### 小川

だから可能性でもいいんですね。今は数値が並んでいるだけでそのヒントもない。

#### 市長

少し頭を使わなければいけないですね。

#### 小川

使ってください。唯一人間に残されているのはそこですから。

あと1点、たまたま博物館と科学館がくっつきまして、新たにまた運営委員になりましたので、先ほどの話は科学館の方で土俵に乗ると思うので、面白い話を聞かせていただきました。

#### 小林

帯広の文化度が高いということですが、確かに帯広のそういった側面を見れば高いところがあるかもしれないけれど、旭川の市民の文化度が高いか低いかは分かりません。

買物公園のお店の意識が低いという話もありましたが、買物公園のお店の意識が低いのは、そこに買いに来る人の意識が低いのかというと、そうでもない気がするんだよね。

私は商売もやっていたのですが、お客さん、小売店、メーカーがあって、メーカー側から眺めているんだけど、意識が一番高いのはお客さんなんですよ。お客さんが高くて、途中にいるものが低いものだから流れていかないという話はあるんです。

そうやって考えると、旭川の文化度が低いからこんなことをやっても失敗するだろうという先入観は1回捨ててかからなければならないというのが、ポリフォニーの開催を通してわかりました。

旭川の人たちも捨てたものではないというところから、まず市長が志を立てて、旭川というまちをもっと文化度を高くするためにこういうことをしたいということがあるんだったら、果敢にやるべきだと思います。旭川の人には理解できないよということを言わないで、まず船出していかないと全然動かないなと思います。是非果敢にやってもらいたい。もう一つは、今ここにデザインギャラリー、コレクション館と建物が二つあり、我々が必死に守っている状態になっているんですね。だんだんお金も苦しくなってきたり、かなり頑張っています。この将来について我々と市とで北彩都全体の中でどういう位置付けにしていけるのかということについて考える機会を是非つくってもらいたいと思います。北彩都の様々な計画の中には、デザインギャラリーのあたりをどうするのか、サイパルの横の建物とこの建物をどのように棲み分けしながらやっていくのか、北彩都の地域の中でここはどういう役割を果たすべきなのかなど、という話は全然出てこない。こういうものを残していくということが前提になれば、当然計画の中に入って来る話だと思います。是非我々と担当者とするいは市全体と話し合う機会をつくりたい。

#### 市長

基本的にはここもサイパルも文教ゾーンですよ。棲み分けとか、人の動線とかをどうするかということですよ。

#### 小林

連動して物事ができるように考えるのか、公園とも関係もありますよね。将来的にはこの道はどういうふうになっていくのかというのもある。裏側が入り口になるかもしれないですし、我々としては認識していません。

#### 市長

宮下通が4車線になるということですから交通量はかなり増えると思います。まだこれはどうなるか分かりませんが、上川神社からサイパルまで歩くスキーのコースになるという話も出ていますが、冬場もそれなりに人が通る空間になりますよね。

#### 小林

我々もどうなるのかなと見ているだけで、どうしていいのかなというのが分からない。

#### 市長

そういう機会をつくらなければいけないですね。

#### 市長終わりのあいさつ

今日はデザインという切り口で、いろいろと貴重なご意見をいただきましてどうもありがとうございました。

多岐にわたりいろいろなご提案をいただいて、私自身の中でもまだまだ消化しきれていない部分もありますが、市役所内でいろいろ勉強させていただいて、できるものもいくつかあるのではないかと考えておりますので、できることからまず手を付けていきたいと思っております。

今日はまだまだ皆さんから深いお話しをしていただくためには、十分な時間ではなかったかもしれませんが、今後、今日いただいたご意見などについて、「この前の話だけど、ちょっとこういう切り口でどうだろう」と具体的に提案していただくことによって、何か事業化

できるようなことがあるかもしれませんが、そのように一緒に知恵を絞っていくことができ  
ればと思っていますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

今日は本当に貴重なお時間ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いしま  
す。